

講演  
IV

## 精神疾患の診断と治療に役立つ社会脳研究



笠井 清登(かさい きよと)

東京大学 大学院医学系研究科・医学部 精神医学 教授

《略歴》

1995年 東京大学医学部卒業。国立精神・神経センターレジデント、東京大学医学部附属病院助手、ハーバード大学医学部精神科・客員助手、東京大学医学部附属病院講師を経て、2008年より現職。2003年 日本生物学的精神医学会学術賞、2008年 日本神経科学学会奨励賞 受賞。

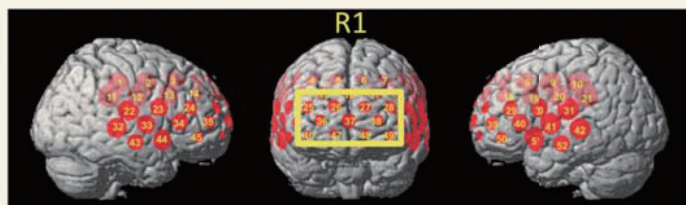
## ポイント!

- 精神疾患を持つ患者さんの心の不調を客観的に捉える手段はありませんでした。
- 最新の脳画像技術により、精神疾患に伴う脳機能の不調を捉えることができます。
- 脳画像技術を、精神疾患の診断や治療法の選択の補助に応用する研究を御紹介します。

うつ病、統合失調症などの精神疾患や、注意欠如多動性障害、自閉症などの発達障害は、一般人口中にそれを抱える人が非常に多い上、人生早期に始まり、本人や家族が抱える社会的困難は長期化するため、疾患に伴う生命や生活への影響の指標は、全疾患中トップとなります。

精神疾患の診断は、患者さんの自覚症状や行動変化、それらの経過の評価によって行われてきました。90年代以降、MRIなどの脳画像計測技術の進歩により、その病態に脳機能・構造の変化が関係することが分かってきました。それでも、MRIなどの技術は大掛かりで、狭い場所でじっとしていなければならない、一人一人の患者さんの診断に応用するには、簡便で自然な状態で検査できる技術の誕生を待つ必要がありました。

近年、日本の企業や研究者が世界に先駆けて開発した近赤外線スペクトロスコピー(NIRS)が精神疾患の脳病態研究に応用され始めました。脳プロ社会脳研究では、この技術を精神疾患や発達障害を持つ当事者の方の一人一人の診断や、治療法の選択に応用する研究を進めてきましたので、その成果を分かりやすく御説明いたします。



近赤外線スペクトロスコピーを用いた  
前頭葉活動計測により

うつ病の75%  
双極性障害の77%  
統合失調症の90%を  
正しく判別



「え」で始まる  
言葉を教えてください



Takizawa et al., Neuroimage, 2013